

氏 名 ふな かわ かねたに み わ  
舟 川 (金谷) 美 和  
学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)  
学位記番号 論 人 博 第 17 号  
学位授与の日付 平成 17 年 11 月 24 日  
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当  
学位論文題目 布がつくる社会関係  
——インド・グジャラート州カッチ県の染色業者カトリーの事例より

論文調査委員 (主 査)  
教授 田 中 雅 一 教授 福 井 勝 義 教授 菅 原 和 孝

### 論 文 内 容 の 要 旨

本博士論文は、インド西部グジャラート州カッチ県におけるイスラーム・コミュニティのひとつ、カトリーを対象とする。彼らの生業は染色である。インドのイスラーム研究は、多数派のヒンドゥー教徒社会ほどではないが、文化人類学的研究は少なからず存在する。しかし、その多くはイスラーム社会内に認められるカーストと類似の集団（コミュニティ）についての研究、すなわちコミュニティ間の関係やその性格などの研究であった。その結果、研究対象はあくまで集団であって、集団内部の個人関係にまで及ぶことはなかったし、またそこに認められる個人間の軋轢を無視してきた。さらに、いかにして人々がインド独立後の急激な社会変化に適応していこうとしてきたのかを、個人の主体性に注目して描写することはなかった。本研究ではカトリーのメンバー（染色職人）のネットワーク形成につながる活動、対立、企業家的精神などに注目し、その動態に迫る。

インドのイスラーム社会を理解するには、ヒンドゥー教徒との相互交流のあり方を無視するわけにはいかないが、これまでの研究では、どちらかというイスラーム社会をひとつのまとまった、はっきりした境界のある世界としてとらえてきた。これに対し本研究では、カトリーたちとヒンドゥー教徒との関係にも注目する。その際、彼らがバーンダニー（絞り染め）という技法で製作している布の使用法に注目する。

本博士論文は序論と結論を含む全12章からなり、2部構成になっている。上述の問題設定（第1章「序論」）と調査地の概要（第2章「調査地の概要」）のあとに、第1部「N工房を中心とする布の生産」が続く。第1部は6章からなる。それらは、第3章「染色カーストとしてのカトリー」、4章「バーンダニーの生産形態」、5章「分業と親族関係」、6章「N工房の歴史」、7章「バーンダニー需要の変化と「手工芸」復興」、8章「現代的変化への対応」である。第2部「布の示すジェンダー、カースト、宗教間関係」は3章からなる。それらは、第9章「頭に被る布の意味と用法」、第10章「指標としての布」、第11章「布着用の変化」である。

第3章では、植民地時代に公刊されたモノグラフやセンサス、地誌を通して、カトリーがどのように記録されているかを明らかにした。また、現在染色に携わるカトリーの人数や、染色業に占めるカトリーの割合をみることによって、カッチ県において染色がカトリーの寡占状態であったこと、それゆえに染色はカトリーの仕事であるとみなされていることを示した。またカトリーには自助組織があることも明らかにした。第4章では、N工房を事例にして染色工程について記述することで、親方、職人、職人を斡旋する仲介者という分業の中で、親方を中心として絞り染めの布の生産が行われていることを明らかにした。第5章では、染色行程は、カトリーのコミュニティを基盤にして行われており、また組織的なまとまりが強いにもかかわらず、そのような組織は生産組合としては機能していないこと、生産や販売は、親族や姻族ネットワークを用いて行われているということを指摘した。第6章では、染色業に関わる個人を中心としたネットワークが、分業のなかから生まれてきたことを示した。また、その分業がどのように形成されたのかを、N工房を経営する親方たちの来歴を追いながら明らかにした。

第7章では、インドにおいて「手工芸」概念がナショナリズムとの関わりで形成され、手工芸復興と開発援助が、手工芸

の生産現場に与えた影響について考察した。第8章では、二つの事例に依拠しながら、カトリーたちがインド独立後の需要の変化と需要のグローバル化に対して、どのように対応しているかを論じている。カトリーたちの対応は、集団としてまとまって行われたものではなく、個人的な人間関係を活用しながらなされてきたということを論じた。

第2部第9章では、カッチ女性が必ず頭に纏うヴェール（オダニー）の意味を分析し、それがヒンドゥーとイスラーム社会に共有されてきたことを明らかにした。また、オダニーの着用は、従来イスラーム的価値と結びつけられてきたが、それはイスラームの慣習というよりも、カッチ女性に共通する慣習であるということを示した。第10章では、婚礼用のヴェールであるチュングリーの色柄が、ヒンドゥーとイスラーム双方にとって、カーストや階層や経済的地位などの指標となっていることを指摘した。第11章では、オダニーの着用の変化が、ヒンドゥー教とイスラームという二つの宗教に属する者の関係の変化を反映していることを考察している。

本博士論文は、布に焦点を当て、布が直接的対面的な関係を持たない者同士の間にも、社会関係を構築する可能性を指摘することで、モノ研究の地平を拓いた。また、布を介在させることによって、イスラームのコミュニティ内部の社会関係と、ヒンドゥーとイスラーム間の社会関係を論じ、従来のインド・イスラーム社会論を批判する新たな視点を呈示している。

### 論文審査の結果の要旨

金谷美和氏の学位申請論文は、およそ1年間の実地調査に基づくインドのイスラーム職人（染色職人）についての研究成果である。金谷氏は、修士論文で日本の民芸運動を取り上げたこともあり、インドの民芸運動あるいは民芸に関する政策に関心を持っていた。また学部ではイスラーム美術を専攻していたこともあって、イスラーム職人たちの製作品に注目することになった。彼女が研究対象に選んだのは、インド北西部に位置し、パキスタンと隣接するグジャラート州カッチ県を活動拠点とするカトリー・コミュニティであった。ここでいうコミュニティはヒンドゥー社会における職業集団であるカーストに相当する。カトリーのメンバーは伝統的な生業として染色に関わり、染め物（布）を生産してきた。

金谷氏の関心は、もともと布という生産物にあった。それがどのように生まれ、流通し（販売と贈与）、消費（着衣）されているのか、そこにどのような意味が付与され、また人間関係を反映すると同時に、人間関係を構成するのか、モノとしての布からインド社会を見ようというのが本研究の基本的な視点である。モノに注目する見方は、土器の研究を除き、ほとんどとられてこなかった。まずこうした視点の独自性を高く評価したい。

金谷氏は、モノ（布）に注目すると同時に、その社会的な意義をも考慮することを忘れていない。具体的にそれは二つの点で、インドのイスラーム研究への貢献となっている。

まず、これまでのイスラーム研究はコミュニティの存在に気を取られ、その構造やコミュニティ間関係がどのようなものであるのか、それがヒンドゥー・カーストについて報告されている特徴とどう違うのか、といったことが中心的な問題意識であった。研究者の視点が集団という準拠枠組にとどまっていたのである。これに対し、金谷氏は染色職人の親方、彼を支える親族ネットワーク、生産組織などについての、文字通り個々人の顔の見える記述と分析を行うことで、いままで無視されてきた集団内部の葛藤や創意、新たな変化などをうまく描くことに成功している。とくに注目したいのは、調査対象となった染色工房の人間関係の描写や、彼らの販売行為についての生き生きとした記述と分析である。

つぎに、インドのイスラーム研究は、いまなおイスラーム社会を境界のはっきりしたヒンドゥー社会とは区別される少数民族としてとらえる傾向にある。たしかに、イスラーム社会とヒンドゥー社会とは区別される。しかし、両者の間にまったく交渉がないかといえばそうではない。とくにインドのイスラーム社会の大半は、本来ヒンドゥー教徒が改宗した人たちである。それゆえもとのカーストに匹敵する職業集団がイスラーム社会においても存在していると言われている。であるとすれば、わたしたちはもっとイスラームとヒンドゥーとの関係を意識した調査や研究をすべきであろう。ここでも金谷氏の貢献は大きい。彼女は、布に注目することでそれが宗教の境界を横断し、二つの宗教集団で、布について同じ価値を共有している事実を明らかにしているからである。実際、カトリーそのものも、もともとヒンドゥー教徒であり、最近まで染色に従事していたヒンドゥー教徒もいた。だがいまはイスラーム教徒だけになり、彼らがコミュニティやカーストに固有のデザインをほどこした結婚式用のヴェールを準備する。カトリーたちは、地域のコミュニティあるいはカーストのデザインを知っていてそれを供給する。布は地域の社会秩序を反映している。同時に、その布を使うことで、人々はみずからの集

団アイデンティティを獲得する。本論文は、布に着目することで、従来見過ごしがちであったインドにおけるイスラームとヒンドゥーとの密接な関係を指摘しているが、この意義は大きい。

カッチ県のヒンドゥー教徒はイスラーム教徒と同じ種類の衣服を着用してきた。しかし、最近ヒンドゥー教徒たちがサリーを着始めて、伝統的な衣服を避けるようになったという。この変化は、両者の宗教集団の関係がより排他的になりつつあることを意味している。それは、カッチが位置するグジャラート州におけるヒンドゥーとイスラームとの対立を反映しているかも知れないし、1980年代半ばから興隆してきたヒンドゥー・ナショナリズムの影響かも知れない。重要なことは、本論文の布への着目が、こうしたより大きな社会変動を考察するうえでも有効であるということである。

以上から、審査員は、モノから社会関係を考察し分析するという方法論的視点の独創性、またインドのイスラーム社会への分析視点の新しさ、とくにこの二点において本論文の貢献を高く評価した。

共生文明学専攻、文化・地域環境論講座は、文明相互の共生を可能にする方策を探求するために創設されたが、その設置目的にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年6月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。